

2020 年 2 月 28 日提出

学位論文要旨

題目：上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程の研究

一橋大学大学院 言語社会研究科 LD172004 藤原未雪

要旨

本研究は、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的とした。

研究で用いた材料文は学術論文と短編小説である。全体の手順として、まず、読み手に誤解をあたえないように正確さをもって書かれる文章である学術論文を使って、学習者の読解過程を調査し、その理解困難点や語義の解釈過程を把握した。その知見を発展させて、人物、場面、感情がからむ文章である小説を使って調査した。学術論文を使った調査では中国語母語話者 15 人、短編小説を使った調査では英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれ 13 人、計 39 人と、日本人大学生 17 人の協力を得た。

調査方法は、協力者に材料文を読みながら母語で口頭翻訳をしてもらい、理解した内容や困難点などを語ってもらうものである。また、調査者からの質問にもこたえてもらった。日本人大学生の場合には、口頭での翻訳がない以外は日本語学習者と同様である。

本研究で扱った課題は次のとおりである。

- (1) テキスト中の語義の解釈はどのようになされ、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (2) テキストの読解で見られる誤読にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (3) 読み手特性と誤読の間に定量的な関係が見られるか。
- (4) 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較すると、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか。また、うまく読める人と誤読する人の読み方に違いはあるか。

第一部は概要と調査方法についてまとめた。

第 1 章(序論)では、本研究の学際的位置づけについて述べた。

テキスト理解を決定する要因の全体像を示し、本研究ではこれらを立体的に考えるアプローチを試みることを述べた。

第 2 章(文章理解)では、文章理解についての先行研究を概観し、本研究における文章理解の考え方を提示した。本研究で主に扱う文章理解はミクロな理解である。本研究でいうミクロな理解とは、語や文の意味の解釈、指示対象の特定といった言語形式の理解である。本研究でミクロな理解を扱う意義は、第二言語の読解教育支援に研究の知見

を生かすため、学習者がテキストを読むときにどのような言語形式が理解困難になるか具体的なデータを収集するためである。

第3章（語義の解釈と誤読に関する先行研究）では、本研究の課題である、第二言語読解における語義の解釈および誤読に関する先行研究を概括した。これまでの語彙の意味類推やテキスト理解の研究では、実験文は一文レベルや語句レベルであることが多く、一文を超えた理解を研究対象としたものはごく限られてた。テキスト理解を研究対象とするなら、テキストを一編すべて読んだときに、どのような解釈をするかを調査する必要がある。本論文では、テキスト一編すべてを材料文として、そこにおける語義の解釈を明らかにした。

第4章（テキストのジャンル特性）では、本研究が材料文とする学術論文と小説をとりあげ、そのジャンル特性が読解にどのような影響を与えるか考察した。また、小説でしばしば議論となる、解釈の多様性と正しい読みの関係について諸意見をまとめたうえで、本論文の立場として、「言語形式に基づく論理的な解釈でなければならない」「解釈が妥当であるかどうかを「正しさ」に求めるのではなくて、周辺の記述や他の部分の記述との「整合性」だけに求める」ことを提示した。

第5章（本研究で重要となる用語の定義）では、本研究で重要となる用語の定義を明確にした。定義したのは、文章理解、テキスト理解を決定する要因、「正しい解釈」と「誤読」、本研究で扱うミクロな理解、「解釈」と「理解」の使い分けである。

第6章（研究方法）では、読み手の文章理解の過程を可視化するために本研究で採用した調査方法について述べた。本研究では、学習者がテキストを読んで理解した内容を収集するために発話思考法を基本とし、調査者からも質問する方法をとった。協力者と材料文について概括した。

第二部では、学術論文の読解過程に焦点をあてて論じた。いずれも中国語を母語とする大学院生を対象とした研究である。

第7章（名詞の意味の誤った理解）では、学術論文の読解における名詞の解釈について論じ、外来語の多義語の問題に加え、固有名詞を普通名詞と取り違える誤読を指摘した。

第8章（1人の読みに注目した語義の解釈過程）では、個別の読みに注目し、学術論文の読解における語義の解釈過程について論じた。「レコード」「ソフト」といった外来語が多義語であるがゆえに、当該の文脈との擦り合わせがうまくいかず、誤読が生じた例を記述した。

第三部では、小説テキストの読解に関する研究を扱った。

第9章(材料文の分析)では、本研究で用いた材料文を分析した。材料文の基本情報を示した。さらに、英語・韓国語・中国語と日本語の談話構成について先行研究を概観したうえで、英語・韓国語・中国語の翻訳テキストと日本語テキストを対照することにより学習者の母語別の読解上の困難点を予測した。その知見を調査デザインに反映させた。

第10章(パイロット研究)では、第三部で論じる小説テキストの読解に関する研究の基礎となったパイロット研究を行った。中国語母語話者4人の読解過程を調査し、小説テキストのどのような箇所が理解困難点となり、また、どのような誤読が見られたかを明らかにした。このパイロット研究で得られた知見と第9章で分析した英・韓・中の翻訳テキストの対照結果を参考にして、テキストのどのような箇所で学習者に質問をするかを決めた。このように、本章で得られた知見を調査デザインに反映させた。

第11章(日本語母語話者の小説テキストの読解)では、日本語母語話者の読解過程について調査した。日本人大学生17人に小説を読んでもらいながら、語句や文の意味をどのように解釈し、また、その際にどのような手がかりを使ったかについて語ってもらった調査を行った。その結果、「ミモザ」「三枚目」「たった一つきり」の語義において解釈のズレがあった。語用論の観点から考察したところ、文章理解の入口段階において語句や文の意味を解釈する際に、関連性の原理に基づいた推論メカニズムが働く限り、解釈のズレは避けられないことがわかった。日本語母語話者であっても、筆者の意図と異なった解釈になるという「ぶれ」が出てくる。そこにはテキストと人間理解の関係の限界性が見てとれた。

第12章(日本語学習者の小説テキストの読解)では、英語・韓国語・中国語母語話者それぞれ13人、合計39人を対象に行った小説テキストの読解の調査結果について、その全体像を簡潔に述べた。協力者の基本データ(JLPTの取得級、SPOT90の点数、小説の読書習慣、辞書を使った回数、自己申請の理解度、結末の理解の正誤)と母語別に誤読の概要を示した。

第13章(誤った語義の解釈と文脈との整合性)では、日本語学習者の読解で見られた誤読のうち、語義の解釈に焦点をあてて考察した。具体的には、誤った語義の解釈と文脈との整合性について論じた。学習者は様々な要因から誤った語義の解釈をする。その要因とは、漢字の字形認識の誤り、音韻情報の使用による誤り、語の構成要素の分析による誤り、多義的な表現の解釈における誤りである。これには母語別の特徴も見られた。誤った語義の解釈について、文脈との整合性を見てみると、ほとんどの語義解釈がすべての文脈、または部分的に文脈と整合性を持つことが明らかになった。

第 14 章（登場人物を指示する要素の読み誤り）では、日本語学習者の文脈理解に焦点をあてて考察した。具体的には、小説テキストの読解において文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素について、日本語学習者が適切に理解しているかどうかを調査した。文脈理解の指標として、文中に明示されている人称詞をはじめ、文中に非明示となっている発話主、ゼロ代名詞、ノ格名詞句を分析の対象とした。これらは結束性をもたらす言語形式である。調査の結果、韓国語母語話者は英語母語話者と中国語母語話者に比べて、誤読が少なかった。その理由として、日本語と韓国語の言語の類似性が示唆された。

本章から次のことが導かれた。語の意味は文の環境で決まり、語と文は連動した存在であると言える。小説読解において登場人物を指示する要素自体が難しいのではなく、これらの要素の解釈は文脈によって規定される性質を持つゆえ、要素をとりまく文の環境が複雑になると誤読を誘発する。その文の環境とは、前出の動作主が後続の文で非明示でありながらもピリオドを超えて継続すること、非明示の動作主が文章の途中で変化していること、長い連体修飾構造、カッコで括られた発話と発話の間にある挿入句の存在があげられた。

第 15 章（定量的な分析）では、調査データを定量的に分析した。母語別の誤読の特徴や、文法に関する誤読と語義に関する誤読、SPOT90 で測定された協力者の日本語能力との関係を考察した。誤読数について英語(13 人)、韓国語(13 人)、中国語(13 人)のグループにおける平均値の差を 1 要因分散分析(参加者間)により検討した結果、次のような結果が得られた（いずれも 5%水準）。

- ①「発話主の特定の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、中は韓より多い。
- ②「字形認識の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は中より多い。
- ③「音韻情報の使用の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英より多い。
- ④「語義全体の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英、中より多い。

第 16 章（日本語学習者の動的な読解過程）では、学習者が小説を読んだときの動的な読解過程について論じた。読み手の解釈は固定的なものではなく、テキストを読み進めるにつれて修正されるのは自然である。一時保留や読み返しもある。さらに、ある文の解釈を誤ったことで、別の文の解釈も誤るような誤読の連鎖もある。本章では、これらの動的な営みに焦点をあてた。

16.1.では、各言語 2 名ずつ、言語毎の特徴がよく現れていると考えられた協力者を選び、タイムラインの図(読み始めから読み終わりまでの読解過程を時間の流れに沿って追跡したもの)を作成した。

16.2.では解釈の修正をもたらしたきっかけについてまとめ、特に、16.3.では正しい理解に修正される過程を質的に記述した。

16.4 では、ある誤読が別の誤読を誘発したような「誤読の連鎖」をとりあげ、調査で見られた 6 例の誤読の連鎖の過程を詳細に記述した。続く 16.5.では、誤読の連鎖という現象から、誤読はローカルな誤読とグローバルな誤読に分けられる可能性を指摘した。

第 17 章(総合考察)では、本論文の総合的な考察を行った。本研究の結論、学習者の母語別に見た読解の特徴、本研究の意義、読解教育への示唆、残された課題について論じた。

総括として、以上の考察を通じて、第二言語読解における理解困難点や誤読について、なぜそれが起こるのか、それが起こるとどうなるのかについて明らかにした。読解過程は雑多なものであるが、どのように雑多であるのか、その中身をできるだけ記述した。

17.2.では、学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴について論じた。そこから、学習者の母語別の誤読からみた読解教育について提案した。

本研究の残された課題は大きく 2 つに分けられる。1 つは手法について、もう 1 つは調査デザインについてである。

まず、読み手の解釈を捉えることの難しさがあげられる。本研究で用いた手法は、理解の質的なデータを得るために発話思考法をもとにしたインタビューや口頭翻訳であった。発話内容である言語情報から協力者の解釈を読み取っていくことになるが、そこには言語表現に内在する曖昧性や、語用論的な推測が介在し、判断が難しい場合もあった。調査では、できるだけ適切に協力者の解釈を捉えようと質問を重ねたが、調査時間という物理的な制約や、協力者の感情にも配慮しながら調査を進める必要があったため、たとえ解釈の曖昧さが十分に解消できなくても、執拗に質問し続けることは躊躇された。その結果、曖昧性を排除しきれないこともあった。これは人を対象とした調査の難しさである。

もう 1 つは、調査で行う質問項目の設定である。質問は文法に関するものと、意味に関するものに大きく分けられる。文法に関する質問は、ゼロ代名詞や人称詞がテキスト中の何を指しているか確認するものである。質問項目の設定には事前に十分なテキスト分析が必要になる。研究開始当初にテキスト分析を行い、それを基にして質問項目を設定した。しかし、研究を進めるにつれて新たな知見が得られることで、それまで気が付かなかった分析の観点が現われ、より緻密で構成的に質問項目が設定できることがわかった。本研究の結論に影響を及ぼすとは考えられないが、緻密で構成的な質問項目で調査をすれば、より踏み込んだ議論ができたと考える。

最後に質的研究と量的研究の融合について述べる。本研究が主眼を置いたのは質的な研究の方であった。質的な研究は現象を繊細にとらえられる反面、常に恣意性の有無とデータ量に議論の矛先が向かいがちで、その価値が正当に評価されないことも多い。それを凌駕するような質的な研究を量的な研究に転換していく方法の確立が必要である。